

社会課題を解決するための コミュニケーション能力の開発

Developing Communicative Competencies for Social Problem Solving

研究代表者 山崎吾郎 (COデザインセンター 教授)

研究協力者

[学内] 伊藤武志 (社会ソリューションイニシアティブ 教授) 今井貴代子 (社会ソリューションイニシアティブ 特任助教) 八木絵香 (COデザインセンター 教授)

上須道徳 (経済学研究科 教授) 大谷洋介 (COデザインセンター 准教授) 辻田俊哉 (COデザインセンター 准教授)

小川歩人 (国際共創大学院学位プログラム推進機構 特任講師) 洲上ゆかり (工学研究科附属フューチャーイノベーション 助教)

田川千尋 (大阪大学大学院人間科学研究科 特任講師)

[学外] 永田宏和 (デザイン・クリエイティブセンター神戸 センター長) 菅野拓 (大阪公立大学大学院文学研究科 准教授) 石塚裕子 (東北福祉大学総合マネジメント学部 教授)

工藤充 (公立はこだて未来大学 准教授) 戸谷洋志 (関西外国語大学英語国際学部 准教授)

1. プロジェクト概要

このプロジェクトでは、社会課題を解決に導くために不可欠なコミュニケーション能力の開発を目的として、PBL (project based learning) 形式を用いた実践的な教育手法の開発と人材育成に取り組んでいます。本プロジェクトでは、取り組む課題の複雑さや規模に応じて段階的なカリキュラムを準備することで、基礎から応用、実践まで、レベル別に教育実践の場を創出することを目指しています。さらに、異なる社会的歴史的な文脈のなかで多様な関係者を巻き込んで現れる「やっかいな問題」に対して、適切にアプローチするための方法を探究しています。

プロジェクトの成果を学際共創プロジェクト (transdisciplinary research project) へと展開することで、教育・研究・実践の分野に有機的な連環を生み出すことを目指しています。PBL形式のプロジェクトは通常少人数で実施されるため、これらの取り組みをより広範囲に、社会的インパクトのある活動へと展開するための場や制度を設計することが、重要な課題となります。

2. 2023年の取り組みと成果

本プロジェクトで蓄積された経験は、『やっかいな問題はみんなで解く』(堂目卓生・山崎吾郎編、世界思想社) という書籍にまとめ、昨年末に出版しました。今年度は、このテキストを活用しながら、引

き続き各種のPBLや大学院生向けの横断型の授業を行いました。基本的な考え方や作法が書籍にまとめられたことで、学外で同様の関心をもつ方々からもさまざまな反響をいただくことができました。

そうした反響のひとつとして、2023年8月に開催したセミナーでは、学外からのゲストとして坂井亮太先生をお招きし、政治学の分野で議論されている「やっかいな問題」について紹介いただいたうえで、本プロジェクトの取り組みの可能性について意見交換をしました(写真1)。

11月には、プロジェクト最終年度を締めくくる総括シンポジウム「やっかいな問題に取り組むための共創の作法」を開催しました。このシンポジウムでは、書籍『やっかいな問題はみんなで解く』に寄稿した執



写真1: 「やっかいな問題」をめぐる研究会の様子

PBLを活用し教育・研究・実践に 有機的関連を作り出す

筆者を含む4名の講演者が、特に「クリエイティブ」、「大学院教育」、「ネットワーク」、「ダイバーシティ」という4つをテーマに焦点を当て、議論を深めました。中之島センターを会場とし、対面とオンラインのハイブリッド形式で、合計113名が参加しました。大学関係者だけでなく、自治体、企業、教育関係者など、様々な分野から社会課題に取り組む多くの方が参集する機会となりました。会場に来た方々とは、ワークショップを通じて意見交換をしました。また、『やっかいな問題はみんなで解く』で紹介された取り組み



写真2: 中之島センターにて、総括シンポジウムの様子

のその後の進展や、書籍では詳細に触れられなかった実際の課題についても、参加者と幅広く意見交換をすることができました。参加者それぞれの立場からの社会課題への取り組みが紹介され、本プロジェクトの活動に対しても貴重なフィードバックが寄せられました(写真2)。

PBLの形式や手法に関しても、新たな進展がありました。本プロジェクトは従来、主に教員がPBLの設計を行い、学生が受講するという形式で活動を進められてきました。本年度は、こうしたPBLを通じて学んだ学生が、今度はみずから企画や運営の側にまわりそれぞれの研究やキャリアの上での関心に即したPBLを実施するという、新しい試みに取り組みました。教員のサポートのもと入念な実施計画を立て、11月から参加学生とともに事前学習を重ね、2月には現地訪問をする予定となっています。このように企画運営されるPBLは、参加する学生にとっての学習機会であるだけでなく、企画運営する学生にとっても異なる形の学びを提供することになります。PBLを通じて学んだ学生が、次には自らの関心に沿って企画段階から学びを深めていくという循環が起り、これにより教育・研究・実践の分野で有機的な連環が生み出され、課題に対して多様な視点からアプローチすることが可能になります。

3. プロジェクトの今後

本プロジェクトでは、社会課題に対応するコミュニケーション能力の開発を推進し、「やっかいな問題」というコンセプトを導入することで、これまで学内で分散していたPBLの取り組みを横断的に関連づけて議論する場を創出することができました。この取り組みにより、実践的な教育手法とその展開可能性についても、発展的な議論を行うことができました。

新たな探究様式を開発することも大きな挑戦でした。PBLを通じて多様な分野・テーマ・課題に取り組む中で、「参加」、「調整」、「創出」、「継続」という4つの重要な契機が明らかになりました。これらの要素を繰り返し問い直し、バランスよく実現させていくことが、実質的な課題解決に繋がると考えています。

この基幹プロジェクトは今年度で終了しますが、これは社会課題が解決したということの意味するわけではありません。「継続」こそが課題解決の決定的な要素であるという認識は、ほかならぬ本プロジェクトの活動を通じて、改めて確認することができました。この観点から、プロジェクト終了後も、その成果を多方面へと展開し、新たな活動を創出していく必要があると考えています。